

パトロンとしての藤原道長

— 『紫式部日記』を主軸にして—

鄭 順 粉*

(e-mail: sunbun@pcu.ac.kr)

目 次

1. はじめに
 2. 道長と文芸
 3. 紫式部抜擢と『紫式部日記』執筆要請
 4. 文芸サロンのリーダー
 5. 演出するパトロン
 6. おわりに
-

1. はじめに

西洋芸術の歴史を概観してみると、それを構成するものとして、芸術作品と、作品を創り出す芸術家(作家)、そして作品や作家を享受する主体が存在することがわかる。ギリシャ・ローマ時代の裕福な市民階級やローマ皇帝にはじまり、中世はローマ教会や教皇などの権力者、そしてルネッサンス時代にはイタリアのメディチ家などの大商人がそれにあたる。単なる職工が偉大な芸術家となりえたのは、こうした享受者が、作品もしくは作家に対して、それらが含有する美と価値を理解し、それらに対して何らかの対価(財貨や名誉など)を払ったためである。芸術は人間の衣食住生活に必要な不可欠な基本要素ではないからである。

芸術の享受者たちは、好きな作品を手に入れるため、普通作家を身边に置いて創作をさせるようなかたちを取った。享受者たちは、いわば作家をまる抱えし芸術を享受していたわけであり、作家の持つ独自の技量やそこから生まれる芸術作品に対する理解と評価が可能なる存在であった。つまりパトロンとは、単に芸術作品の経済的・物質的担い手というこ

* 培材大学校 日本学科 副教授 日本古典文学

とだけでなく、芸術家を理解し、作品を評価して、芸術家に支援を与える人々のことである。単に「芸術創作における経済的な面を引き受ける人々」というよりは、それらの産物(作品)を享受する者であることからむしろ「支援を与える享受者」と定義した方がより適切であろう。パトロンが芸術の愛好者であり理解者であるということは、場合によっては、制作を鼓舞するアイデアやインスピレーションを与える存在であることをも意味する。十七世紀のフランスではポンパドール婦人をはじめとする王侯貴族がその役割を果たし、彼らの肖像画は当時の作家の代表作となっている。

芸術創造の長い歴史の上で芸術の保護者であるパトロンたちが果たした役割は決して小さいものではない。富と権力を誇るルネッサンスの王侯貴族や教会、新興の近代市民階級、コレクターや画商、そして現代の政府・企業などは、芸術のあり方に多大な影響を与えてきたのである¹⁾。

日本にもパトロン²⁾によって文学が隆盛した時代がある。平安時代の摂関政治では、貴族たちが競って娘を天皇に嫁がせ、生まれた皇子を天皇に即位させて外戚関係を築き、権力を握ろうとした。周辺に集められた女房たちは、知性を磨き合い、高め合って女房文学が花開いたのである。摂関体制がそのパトロンの役割を果たしたと言えるが、中でも平安中期の一条天皇の時代はその絶頂期だったと見られる。

一条天皇期は、道隆・道長兄弟のもとで藤原氏の権勢が最盛に達した時であり、皇后(中宮の時代もある)定子のサロンや中宮彰子のサロン、大斎院選子内親王のサロンなどが並立し、教養ある女性たちが宮中にひしめき、機知に富んだ会話や和歌のやり取り、雅びな宴、洗練された文化が栄えた。道隆の娘である定子のサロンには、才女清少納言がいて、自然をめぐる風雅な世界やウイットのある歌説話の世界、そして帝と中宮定子、女房たちの知性が作り上げた華やかな世界などを『枕草子』を通して描き出した。それに対敵するように、道長は、長女彰子のサロンに、紫式部をはじめ、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔など、後世に名を残している才女たちを多く集めていた。その彰子サロンの中心にはパトロン道長がいて、当時の女房文学を主導したのである。もちろん道長は自分の権力維持や家の栄華を目的にしていたのであろう。しかし、平安女房文学があれほど栄えたのはやはり道長に負うところが大きいと言える。しかも、道長は単なる文芸の後援者に止まらず、より積極的なかたちで文学創作に関わろうとした。そのような道長の文芸後援については、すでに明らかにされた面もあるが、本稿では、『紫式部日記』を主軸にして、より深

1) 西洋の芸術の歴史をパトロンによって解くものとして、高陸秀爾(1997)『芸術のパトロンたち』(岩波新書)があり、本稿もそれに多くの示唆を受けている。pp.1-232

2) 日本語ではパトロンと言えば、芸術家を支援する後援者の意味のほか、女性に月々のお手当てを渡したり開業資金を提供したりする男性のことをさす場合もあるが、本稿においては当然ながら前者の意味に限って用いている。

化したところまで探してみたいと思う。すなわち、道長のパトロンとしてのありかただけでなく、彼が一般のパトロンとは異なって如何に新しいものを開拓したかのところまで究明する。

2. 道長と文芸

道長は、摂関政治が絶頂期に達した時、位人臣を極め、その子女十三人³⁾の中から、三后(彰子、妍子、威子)、二女御(嬉子、寛子、盛子を入れると三女御)、二関白(頼通、教通)、孫に三帝(後一条、後朱雀、後冷泉)と、十世紀から十一世紀にかけて、権力を一手に掌握していた人物である。

道長の父にあたる藤原兼家は、藤原氏の権勢体制を築いた基経から五代目で、師輔の三男であったが、長兄伊尹や次兄兼通が早くも薨去し、兼家が摂政になったのは寛和二年(九八六)で、道長二十一歳の時であった。道長は、翌年源雅信の女倫子と結婚する⁴⁾が、父が摂政になったこともあり、翌年権中納言、四年後の正暦二年(九九一)には権大納言になった。正暦元年(九九〇)五月八日、父が病気で職を辞したので、長兄道隆が同日関白、同二十六日に摂政に就任する。しかし、道隆は、世を保つことわずか五年で、長徳元年(九九五)四月に薨去する。この年は、中関白道隆だけでなく、閑院大納言朝光、小一条左大将濟時、六条左大臣重信、栗田右大臣道兼、桃園中納言保光、山井大納言道頼などの高位の人々が一挙に薨去した。やがって天運が五男である道長に回ってきたわけで、姉の東三条院詮子(一条天皇の母)の支援もあり、甥の伊周(長兄道隆の長男で中宮定子の兄)を蹴落としてから長徳元年五月十一日に内覧の宣旨を受ける。道長は、同年六月十九日右大臣となり、いよいよ氏の長者となって天下を掌中にしたのである⁵⁾。

子供の頃道長がどのような教育を受けたかは、それを伝える文献や資料が残っておらずはっきりしたことは分からないが、一般の貴族教育を受けていたと考えて差し支えないであろう

3) 『尊卑分脈』には、「三条院女御盛子及び女子、都合十五人」とある。

4) 道長は、源雅信の女である倫子と結婚するが、源雅信は宇多天皇の皇子である敦実親王の男で、賜姓源氏となり、左大臣にいたった人物である。『栄花物語』巻第三によれば、道長が仲人を介して倫子との結婚を申し入れると、雅信は后がねとして愛育していた女を青二才に与えられるものと拒否したとあるが、倫子の母穆子が、普通の女性とは異なり人物を見抜く洞察力を持っていたため、道長の将来性を買い、夫の反対を押しきって道長と倫子の結婚を進めている。また、道長は『栄花物語』巻第八によると、子息頼通の結婚に際して「男は妻がらなり」と言ったとあるように、道長にとって結婚はとりわけ自家の繁栄を左右する重大な関心事であったことが分かる。

5) 道長が権力を握るまでの経緯については、従来多くの論が発表されており、例えば清水好子(1967)「藤原道長」(『中古文学』1)や山中裕(1995)「摂関政治史—藤原道長を中心として」(『調布日本文化』5)などに詳しく述べられている。pp.13-22、pp.19-38

う。平安時代の貴族男性は、文章の書き始めが七歳から十歳頃にかけてであった。普通は、書き始めは『孝経』が、読み始めには『貞観故要』がそれぞれ用いられ、道長もそうしたものから入って、漢学を基礎としながら、和歌、音楽、書画、詩文へと進んだものと見られる。『源氏物語』で、光源氏がわが子夕霧に対して厳しい教育を施したことが参考になる。

道長の文芸に対する興味や素養については、『紫式部日記』をはじめ、『御堂関白記』『小右記』などの漢文日記の記事によって垣間見られるが、大体、作文と和歌、文献収集、三つの分野で文学的な造詣を発揮していたと思われる。作文に関する記事は、『御堂関白記』や『小右記』に多く見られ、特に寛弘元年(一〇〇四)、二年(一〇〇五)に集中している。道長三十九才、四十才の時、身分も安定し、長女の彰子は押しも押されぬ中宮として時めき、男たちも未来の関白をめざして成長している時であった。すなわち、道長が政治家としても家庭人としても最も安定していた時期であった⁶⁾。和歌の素養については、『紫式部日記』において女房たちに行事と和歌を促す様子や道長自ら和歌を詠む場面などに表わされており、漢文日記にも道長が和歌会を催したことが記されている⁷⁾。また、道長は、文献収集にも力を注いでおり、直接種々の文献収集もさることながら、二千巻に及ぶ書籍を贈った頼明や、家の蔵書三千五百巻を贈った陳政などの逸話を見合わせると、道長の文芸好きは相当なものであったと言える⁸⁾。この三部門を通じて活躍したのは、行成、匡衡、公任、斉信、俊賢といった当時の代表的な学者たちであるが、道長も彼らに負けない文芸愛好家だったことが明らかになる。

道長の文芸好きは、単に文芸の享受者に止まるものではなかった。道長は世界最古の長編小説『源氏物語』の作者紫式部、奔放な情熱歌人の和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔など、後宮女房達が醸し出した華麗な女房文学を高めた最大の文芸後援者であったことを見逃してはならないであろう。それは長女彰子の「后がね」の子女教育に関わるもので、『枕草子』二一段に見える、宣耀殿の女御の父、藤原師尹の「一には、御手を習ひたまへ。次には、琴の御琴を、人より異に弾きまさむとおぼせ。さては、古今の歌二十巻を皆うかべさせたまふを、御学問にはせさせたまへ」の言辞に見られる如く、娘の教養を高めるために有名な女房たちを彰子後宮へ集めたのである。特に道長は、定子の中宮時代に中宮大夫であったので、清少納言を始めとする定子サロンを実際に眺めてきてお

6) 酒井みさを(1977)「藤原道長と文学」(『平安朝文学の諸問題』笠間書院)によれば、『御堂関白記』『小右記』の中に六十六例が見られる。pp.248-252

7) 道長の和歌活動については、片山剛(2001)「藤原道長の和歌活動(上)—その前半生を中心に」(『史聚』34)、同(2001)「藤原道長の和歌活動—三条朝まで」(『金襴短期大学研究誌』32)、同(2002)「藤原道長の和歌活動(下)—晩年の活動その他」(『金蘭国文』6)に詳しい。pp.33-52、pp.13-21、pp.29-47

8) 道長が漢籍輸入に熱心で、それが寛弘期の日本の文壇を如何に変化させたかについては、岡部明日香(2001)「藤原道長の漢籍輸入と寛弘期日本文学への影響」(『奈良・平安期の日中文化交流』(農山漁村文化協会)に述べられている。pp.302-316

り、長女の彰子のもとには、有名な女流文学者を多く仕えさせようとした。中でも文学者の家系の人で物語の作家としても有名であった紫式部を、道長夫妻ともに遠いながらも血縁関係にあった関係から、執拗に要請し、ついに寛弘二年(一〇〇五)十二月二十九日(年に異説あり)、中宮彰子のもとに出仕させるに成功する。紫式部の才能や抜擢過程については次節でまた詳述するが、仮名文学だけでなく、父も驚くほどの漢文学にも通じていたため、紫式部は、中宮に「楽府」を進講したり、世話をしたりしつつ、『源氏物語』を書き継いでいったものと考えられる。『紫式部日記』を見ると、若宮の御五十日の祝いの日(寛弘五年十一月一日)に、喜びに酩酊している道長に辟易して宰相の君と一緒に隠れていたところを、道長が几帳を取り払って、二人の袖をとらえて、お祝いの歌を詠んだら放してやると言われ、「いかにいかがぞへやるべき八十歳のあまり久しき君が御代をば」と詠むと、道長はしきりに感心し、「あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ」と、ひどい酔いの中でもちゃんと返歌を詠んだり、御冊子作りの段では、式部が里から持ってきて隠しておいた物語の原本を、中宮の御前に出ている留守に、道長がこっそり入って探し出し、内侍の督の殿(妍子)にあげた話、次いで「渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせて明かしたるつとめて」の、道長との贈答歌などから見て、式部は、中宮サロンの重要人物の一人であり、道長はそういった面からも式部のよきパトロンであり、『源氏物語』完成のかけの功労者であったと言える⁹⁾。

同じく感性の鋭さや身の苦しみなどを巧みに利用して、和泉式部を彰子に仕えさせたのも道長である。和泉式部は、家集の正・続集約一五〇〇首もさることながら、『拾遺集』以下の勅撰集に収められた歌が二四六首であり、死後初の勅撰集である『後拾遺集』の最多入集歌人という名誉をも得ている。赤染衛門は、文章博士大江匡衡の妻で、倫子に仕え、彰子入内とともに従った女房である。『栄花物語』作者に目され、和歌でも家集があり、勅撰集に収められた歌も九三首にいたる。和泉式部が情熱的な歌風だったのに対して、赤染衛門は和やかで典雅な歌風と評される。伊勢大輔も、彰子に仕えた女流歌人で、三十六仙の一人である。奈良の僧から献じた八重桜を、「今年の取り入れ人は今参りぞ」と紫式部に促されて詠んだ一首「いにしへの奈良の都の八重桜けふ九重に匂ひぬるかな」(『詞花集』春29)は「定家卿詞花集秀逸十首の内也」の評があり、『拾遺集』以下の勅撰集にも五一首の歌が収められている¹⁰⁾。以後上東門院彰子の側近として、長元五年(一〇三六)上東門院の菊合わせには左の頭を務めている(『後拾遺集』)。

以上、中宮彰子の文芸サロンの隆盛について述べてきたが、道長は、文芸好きの一

9) 山中裕(1996)「紫式部と藤原道長—源氏物語の背景」(『古代学研究所紀要』6)には、『源氏物語』の執筆をめぐる道長と紫式部の関係が詳細に述べられている。pp.9-14

10) 『袋草紙』にも「万人感歎、宮中鼓動云々、又彼人第一歌也」と讃えられている。

条帝¹¹⁾をいただきながら、時の権力者らしく、人(特に女房たち)を巧みに用い、その長所をよく伸ばし、古今御曾有の平安文学を作り出したと言える。

3. 紫式部拔擢と『紫式部日記』執筆要請

道長の最も優れた文芸業績と言え、紫式部を拔擢して、『源氏物語』の創作と普及、『紫式部日記』の執筆に関わり、後援したことになる。

紫式部は、越後守藤原為時の娘で母は摂津守藤原為信女であるが、幼少期に母を亡くしたとされる。同母の兄弟に藤原惟規がいるほか、姉の存在も知られる。式部は、道長と同じ藤原氏の北家生まれで、曾祖父の代に溯れば名家の家柄である。父方の曾祖父である藤原定方と藤原兼輔はそれぞれ右大臣と中納言、母方の曾祖父藤原文範も中納言の職にまで達した人物である。しかし、祖父の代以後は受領に下ってしまい家柄が保てなかった。父為時は三十代に東宮の読書役を始めとして東宮が花山天皇になると蔵人、式部大丞と出世したが、花山天皇が出家すると失職し、十年後一条天皇に詩を奉じてやっと越前国の受領となった後、越後守にも任じられている¹²⁾。

文学の血という目で見ると、曾祖父藤原兼輔は『古今集』の撰者紀貫之などとも親交があり(『貫之集』)、自らも私家集『中納言兼輔集』を遺すほどの歌人だった人物である。中でも和歌「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな(『後撰集』巻十五 雑 1102)」は有名で、『源氏物語』にも何度も引用されている。その息子で式部には祖父に当たる雅正も、さらに息子で式部の伯父にあたる為頼も歌人である。また父の為時は、歌人でありながら漢詩や漢文に通じ、漢学で身を立てようとした人であった。母方の曾祖父の文範もまた漢学を修めている。式部の中に和漢の教養が二つながら流れ込んでいるのには、代々を重ねた血族たちの歴史があったからである。『紫式部日記』には、一条天皇が『源氏物語』を読んで「この人は日本紀をこそ読みたるべけれ。まことに才があるべし」と歴史と漢文への深い教養に感心し、宮中に「日本紀の御局」というあだ名ができた逸話が記されているが、その後自分の漢文の素養について次のように語っている。

この式部の丞といふ人の、童にて書読みはべりし時、聞きならひつつ、かの人はおそう読みとり、忘るるところをも、あやしきまでぞさとくはべりしかば、書に心入れたる親は、「口惜し

11) 一条天皇は、文芸に深い関心を示し、『本朝文粹』などに詩文を残しており、音楽にも堪能で、特に笛を能くしたという。また、人柄は温和で好学だったといい、多くの人に慕われた。

12) 紫式部の出身については、古典的なものとして今井源衛(1967)『紫式部』(『国文学』12-1)、与謝野晶子(1969)「紫式部新考」(『日本文学研究資料叢書源氏物語1』有精堂)などがある。pp.9-14、pp.1-16

う、男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ」とぞ、つねに嘆かれはべりし。

それを、「をのこだに才がりぬる人は、いかにぞや、はなやかならずのみはべるめるよ」とやうやう人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたしはべらず、いとてづつに、あさましくはべり。
(『紫式部日記』)13)

紫式部の父為時は息子(式部の弟である惟規)に幼学ながらしっかりした基礎を教えており、式部は、それをそばで聞き習っていて自然に漢文が身につけてしまった。父の思いとして紫式部のことを「女であることが残念」と書かれており、当時の貴族男性の学問そのものを学んだものの、女性だからその学問の素養は意識して隠してきたというのである。

紫式部は、一条朝の著名な漢学者である人(為時)の娘として生まれたが、物心つかぬうちに生母に死に別れ惟規とともに母なき家庭に育ち、家庭のぬくもりには、恵まれなかった。それゆえ、漢学者の父に直接育てられたことは、平安朝の平均的受領階級の子女とは違った幼少時体験を持ったと推せられる。父親の書物を読んで育ち、十一世紀にその才能が開いた。父は男と対等な人格に育て、彼女自身も父の意に添い、精神的に独立の自覚のある女性に育ったと思われる。さらに、歌人でもあった紫式部は、中古三十六歌仙の一人でもあり、『小倉百人一首』にも「めぐりあひて見しやそれともわかぬまに雲がくれにし夜半の月かな」歌で入選している。

紫式部は、父為時のもとで弟惟規とともに養育されていたことが分かるが、為時一家の所在した場所は、『河海抄』の「料簡」に、「旧跡は正親町以南、京極西類、今東北院向也」と記されていて、現在の廬山寺のあたりである式部の曾祖父兼輔の邸の堤邸だったと推定される。堤邸は、『拾芥抄』に、「土御門南、京極西、南北二町、其南一町被入之道長公家、或大入道長上東門院是也」とある京極殿と、東京極大路をはさんで東北方の筋向にある。京極殿(土御門第)は、もともと道長の北の方倫子が父源雅信より伝領した鷹司殿で、のちに道長が大江匡衡の所有していた南一町を購入して拡張したものである。従って、紫式部が堤邸に住んでいたとすれば、倫子は紫式部を幼いころから知っていた可能性がきわめて高いことになる。また、倫子と式部とは定方の曾孫で、二人は再従姉妹の間柄になるから、面識以上の親しい交際があったであろう。

道長は、その多彩な才能の紫式部を長女彰子の家庭教師にと望んだ。しかし、真面目で内省的な紫式部には宮廷の雰囲気合わなく、早々と実家(弟邸)に帰ってしまう。道長は再三の迎えを送り、やっと紫式部を彰子の女房に出仕させることに成功している。

紫式部が彰子サロンに出仕し、『源氏物語』がある程度完成し手直しの段階に入ったころ、中宮彰子が懐妊するという一大事件が起こる。道長は中宮御産をめぐる出来事を書き記すようにと式部にひそかに要請したものと見られる¹⁴⁾。

13) 『紫式部日記』の本文引用は、新編日本古典文学全集本(中野幸一 小学館 1994)による。以下同様。
p.209

『紫式部日記』には、『枕草子』のような跋文が付されておらず、執筆の経緯や契機についてはよく分からないが、少なくとも道長の要請は公的なものではなかったであろう。しかし、紫式部自身が私的な創作意欲に駆けられて書いたものでもないと思われる。彰子後宮には、すでに成立していた『枕草子』に対抗するような後宮の記録が求められていたし、その適任者が紫式部のほかにいないという雰囲気は何となく出来ていた。それをいつどのように書くかのことが残っていた状況で、寛弘五年(一〇〇八)の秋にいよいよ執筆に値する出来事が起きたのである。道長一族が待ちに待った皇子の誕生である。中宮彰子の妊娠と出産は、政権獲得のための準備を着々としてきた道長にとって、栄華を決定的なものにできる一大事であった。この慶事を迎えて、『枕草子』のような「さばかりさかしだち、真名書きちらしてはべる」¹⁵⁾かたちではなく、中宮彰子後宮の文学を成立させる状況が整ったのである。

『紫式部日記』は、執筆の段階から記録性を強く保持することで出発しているが、しかし、道長が紫式部に期待したのは、女房日記の行事描写をそのまま受け継ぎ、また漢文日記を和文に直訳したような事実の羅列に終わるような記録ではなかったであろう。清水好子氏が「中宮御産、皇子誕生といった大事件は朝廷や道長の日記にまず公式には書き込まれるので、紫式部の仮名日記は記録として第一に必要なものではなかった」¹⁶⁾と述べるように、美しい和文でもって個性的に生き生きと読者にせまるかたちで道長家の繁栄ぶりを歌い上げるべきだったのである。道長は、紫式部の日記執筆において、基本的には記録文の型を堅持しながらも、前例のない新しい作品を開拓するようにと暗暗裏に望んだのであり、結果的には紫式部が道長の要請に旨く応じて個性的で独自の日記の世界を創り出したと見られる。

4. 文芸サロンのリーダー

『紫式部日記』によれば、道長は内省的な彰子の代わりに実質的な文芸サロンのリーダーとなり、さまざまな文芸活動を支援していた。

14) 道長が『紫式部日記』の執筆を要請したかどうかの問題は、従来論点になってきたが、渡辺久寿(1978)「紫式部日記考(一)—道長執筆要請説の妥当性について」(『日本文芸論集』5)は、強い記録性から道長の要請説は穏当であるとし、「式部が、記事の内容その他に関して必要以上の制約を受けずそれどころか却って、堅苦しくなく書いてくれと道長の要望を受けたかの感さえ与える」とする。pp.30-49

15) 『紫式部日記』消息文的な部分における清少納言批判については、従来も多く注目されてきたところで、例えば、山本淳子(2001)「『紫式部日記』清少納言批評の背景」(『古代文化』53-9)にも述べられている。pp.24-33

16) 清水好子(1966)『源氏物語論』(塙書房) p.167

例えば、彰子が一条天皇の中宮として敦成親王(のちの後一条天皇)を道長の土御門第で産み、その五十日の儀も無事了った寛弘五年(一〇〇八)十一月十七日、里内裏一条院に帰還することを語る場面がある。道長の日記『御堂関白記』によれば、中宮は輿、若宮は金造の車に乗り、別当以下を従えて一条院に到着し盛大な宴があった。供奉の一同が退出した後、天皇の仰せによって若宮が祖父道長に抱かれて御前に参上し、父子の初対面があった。その一条院還御の直後、道長は心をこめた贈り物を彰子に与えている。

よべの御おくりもの、けさぞこまかに御覧ずる。御櫛の篋のうちの具ども、いひつくし見やらむかたもなし。手篋一よろひ、かたつかたには、白き色紙つくりたる御冊子ども、古今、後撰集、拾遺抄、その部どもは五帖につくりつつ、侍従の中納言、延幹と、おのおの冊子ひとつに四巻をあてつつ、書かせたまへり。表紙は羅、紐おなじ唐の組、かけごの上に入れたり。下には能宣、元輔やうの、いにしへいまの歌よみどもの家々の集書きたり。延幹と近澄の君と書きたるは、さるものにて、これはただ、け近うもてつかはせたまふべき、見知らぬものどもにしなさせたまへる、いまめかしうさまことなり。(『紫式部日記』)17

すなわち、御櫛の篋のほかにも手篋一双を贈っているが、その手篋の上段には、当代の能書行成と延幹が分担執筆した新写の三勅撰集の、四巻ずつを一帖に製本した豪華な書籍を、また下段には能宣や元輔の歌集を当時能書家で著名であった延幹と近澄に書かせたものを収めている¹⁸⁾。道長は、これから一条天皇と一緒に暮す彰子が和歌の教養に励むようにと気を配ったのである。

道長が彰子サロンの文芸活動を後援したのは、仮名の和歌集だけではなかった。漢籍を贈る場合もあった。

宮の、御前にて、文集のところどころ読ませたまひなどして、さるさまのこと知ろしめさまほしげにおぼいたりしかば、いとしのびて、人のさぶらはぬものひまひまに、をとしの夏ごろより、楽府といふ書二巻をぞ、しどけながら教へたてきこえさせてはべる、隠しはべり。宮もしのびさせたまひしかど、殿もうちもけしきを知らせたまひて、御書どもをめでたう書かせたまひてぞ、殿はたてまつらせたまふ。(『紫式部日記』)19

17) 前掲書 p.174

18) 目崎徳衛(1994)「道長をめぐる能書」(『水荃』16)には、道長がすこぶる書跡愛好家で、名筆をよく集めよく散じており、そのことが書跡の芸術的価値を高め、ひいては能書の社会的地位も定めたと述べられている。pp.11-15

19) 前掲書 pp.209-210

道長が式部の中宮への楽府進講のことを知り、漢籍を美しく書かせて中宮に贈っている。当時漢学は女性の教養の中に含まれていなかったが、天皇や男性貴族との交流のために必要だった。これは、道長が中宮の父というにとどまらず、中宮の後宮文化の後援者、推進者としての側面を持つと言えよう。

道長が彰子後宮の文芸後援において、最も気を使ったのは紫式部の『源氏物語』執筆や完成であろう。『紫式部日記』はその様子を詳しく記しているが、まず次の場面を見てみよう。

局に、物語の本どもとりにやりて隠しおきたるを、やをらおはしまいて、あさらせたまひて、みな内侍の督の殿に、奉りたまひてけり。よろしう書きかへたりしは、みなひきうしなひて、心もとなき名をぞとりはべりけむかし。
(『紫式部日記』)20)

道長は紫式部が中宮の御前に伺候している間、局に潜入し、隠し置いていた「物語の本ども」を次女の内侍の督の殿である妍子に与えたとある。ここで「物語の本ども」というのは、草稿本に手を入れて清書した『源氏物語』であり、道長が作者の執筆を援助しなくてはこういうことまではさすがに主人であるとしてもできなかったであろう²¹⁾。

また、物語の御冊子作りにおいても、中宮彰子の指示のもとで行われてはいるものの、実質的な援助は道長が行っていた。

入らせたまふべきことも近うなりぬれど、人々はうちつぎつつ心のどかならぬに、御前には、御冊子づくりいとなませたまふとて、明けたてば、まづむかひさぶらひて、いろいろの紙選りととのへて、物語の本どもそへつつ、どころどころにふみ書きくばる。かつは綴ちあつめしたたむるを役にて、明かし暮らす。「なぞの子もちか、つめたきに、かかるわざはせさせたまふ」と、聞こえたまふものから、よき薄様ども、筆、墨など、持てまゐりたまひつつ、御硯をさへ持てまゐりたまへれば、とらせたまへるを、惜しみののしりて、「もののくにて、むかひさぶらひて、かかるわざし出づ」とさいなむ。されど、よきつぎ、墨、筆などたまはせたり。
(『紫式部日記』)22)

彰子は内裏への還御にあたって、行事がいろいろ引き続き多忙であるにもかかわらず、物語の冊子を作るのに夢中で、紫式部も書写を依頼する手紙を書いたりして奔走してい

20) 前掲書 p.168

21) 福家俊幸(2006)「『紫式部日記』道長描写の方法」(『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学)』54)には、道長の行動は「『源氏物語』が格好の贈り物たりえるだけの評判を得ていたことの何よりの証左であり、また「道長が作者の執筆を後見していたこと」を暗示しているとする。p.5

22) 前掲書 pp.167-168

る。道長は、彰子の産後の冷えを案じつつも、筆や墨、硯などを献じており、冊子作りの作業を全面的に支援する。紫式部は、そういう道長の行動を主家の繁栄を彩る文化の一つとして小まめに書き記している²³⁾。

道長と『源氏物語』との深い関わりを窺わせるもう一つの場面がある。

源氏の物語、御前にあるを、殿のご覧じて、例のすずろごとども出できたるついでに、梅のしたに敷かれたる紙にかかせたまへる。

すきものと名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ
たまはせれば、

人にまだ折られぬものをたれかこのすきものぞとは口ならしけむ
めざましう」聞こゆ。

(『紫式部日記』)²⁴⁾

この記事は、その位置から、寛弘六年(一〇〇九)のことと考えられ、彰子の御前にある『源氏物語』も御冊子作りで作られた写本になろう。ここにはその『源氏物語』をめぐる道長との歌の贈答が記されており、道長の『源氏物語』への関心を如実に示している。

『源氏物語』は当時相当評判になっていたらしく、道長その人までも無関心ではいられず、積極的に和歌でもって言及していると見られるが、これもまた彰子後宮の文芸の上昇ぶりを語るものとして見てよからう。

中宮彰子に比べて父道長は、より積極的に文芸後援に乗り出し、文化指導者としての面貌を見せていると言えるが²⁵⁾、次の場面を見てみよう。

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、ことはつるままに、宰相の君にいひあはせて、隠れなむとするに、東面に、殿の君達、宰相の中将など入りて、さわがしければ、二人御帳のうしろに居かくれたるを、とりはらはせたまひて、二人ながらとらへ据ゑさせたまへり。

「和歌ひとつつつ仕うまつれ。さらば許さむ」とのたまはず。いとほしくおそろしければ聞こゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまり久しき君が御代をば

「あはれ、仕うまつれるかな」と、ふたたびばかり誦せさせたまひて、いと疾うのたまはせたる、

あしたづのよはひしあらば君が代の千歳の数もかぞへとりてむ

23) このように、道長が『源氏物語』の完成の援助に乗り出したのは、当時『源氏物語』が宮中で人気を博していたため、紫式部は当時の第一の権力者の後援を書き記しているのは、それによって『源氏物語』の権威を高めようとしたものと見られる。福家俊幸(2006)の前掲論文に論じられている。pp.1-12

24) 前掲書 p.214

25) 例えば、池田尚隆(1989)の「藤原道長—文学愛好者・文壇後援者」(『国文学』34-10)によれば、道長は書籍収集や作文に関する活動をし、和歌についても造詣が深かったことが確認できる。pp.68-72

さばかり酔ひたまへる御心地にも、おぼしけることのさまなれば、いとあはれに、ことわりなり。
げにかくもてはやしきこえたまふにこそは、よろづのかざりもまさらせたまふめれ。千代もあくま
き御行末の、数ならぬ心地にだに、思ひつづけらる。(『紫式部日記』)26)

寛弘五年(一〇〇八)十一月一日の敦成親王の五十日の祝いの時の出来事であるが、この日の宴は子の刻に終わり(『小右記』)、紫式部は宰相の君と相談して身を隠していた。宴席の乱れに辟易したからである。しかし、二人は道長にすぐ見つかってしまい、賀歌を詠むようにと要求される。紫式部は、ひどく酔っている道長を「いとはしくおそろしければ」としており、主人の酒気を帯びた様子といつもながらにこういう時に歌を詠まされることへの不満があったようであるが、その後、道長の「あしたづの」歌を「いとあはれに、ことわりなり」と記し、「まったく道長ほどの権力ある方が外祖父として、このように若宮を大切にとりもたれ、後ろ盾をなさるからこそ万事万端の儀式の装飾も箔がついて立派に見えるのだろう」27)と、讚美一方の言葉で結ぶ。ここでは、道長がめでたい行事において女房達に賀歌を詠ませた後、自らもそれに唱和し、めでたい場を盛り上げようとしたことが確認される。

また、寛弘七年(一〇一〇)正月二日の臨時客の夜には、酔った道長を煩わしく思って隠れた式部を見つけて、道長が退出した父為時のことで式部を責め、初子の日の歌を強要する場面が出てくる。この時、紫式部は「うち出でむに、いとかたはならむ」として歌は記さない。道長に要請されてこのような時に歌を詠むことが紫式部に期待される役割だったことに変わりはない。

前述したように、中宮彰子は積極性に欠け、才女紫式部に活躍の場を与えるだけの才には欠けていたらしい。清少納言をうまく泳がせて機知の才を発揮させ、自身の後宮文化の顕彰の役割を果たさせた定子とは異なったのである。その消極的な彰子にかわってその役割を果たしたのが父の道長だったと思われる。そもそも、紫式部自身も、清少納言のように軽妙な応答で宮中の評判となることはできない。暗く非社交的な性格の持ち主で、同僚女房の眼をはばかりところもある。その内気で社交に不器用であった紫式部の才を発揮させたのは、他ならぬ道長だったのである。紫式部はその日記においてそのような道長とのやり取りの様子を記すことによって彰子後宮の栄華を描こうとしたものと見られる。

5. 演出するパトロン

『紫式部日記』には、秋色に染まり行く土御門第の美景と中宮彰子の立派な様子を讚

26) 前掲書 pp.165-166

27) 前掲書の頭注 p.166

える冒頭部の後に、風流な道長の姿が次のように描き出される。

渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ちぬに、殿ありかせたまひて、御隨身召して、遣水はらはせたまふ。橋の南なるをみなへしのいみじうさかりなるを一枝折らせたまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわろからむ」とのたまはするにことつけて、硯のもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見るからに露のわきける身こそ知らるれ
「あな疾」とほほゑみて、硯召しいづ。

白露はわきてもおかじをみなへしころからにや色の染むらむ (『紫式部日記』)28)

朝霧の中に散歩していたこの家の主道長は、女郎花を折り取ってそのまま渡殿にある紫式部の局を訪れ、歌を求める。紫式部は、朝顔を恥じながらも、「をみなへし」の歌を詠み、女郎花の盛りの色に事寄せて主人の栄華を讃美する。道長はそれに満足し、「白露は」の歌をもって唱和し、風流な贈答を完成させる²⁹⁾。

この場合、道長の女郎花を折って紫式部に差し出した行為は、伝統的な和歌の詠法からすれば、紫式部を恋い慕う女性とし、自分をその恋の成就を求める男に擬すものである。和歌の世界では、女郎花は女性を喩えるもので、それを手折る行為は、花を折る意味のほか、相手の女性を自分のものにする意味をも持している。つまり、道長の行為は、和歌の歌語のイメージを利用して、まるで恋愛中の男女の間にありそうな場面を演出し、それに対する式部の反応や対処を見ようとしたのである。紫式部は、そのような道長の意図に気づき、道長の恋歌的な意味性を保持しながらも機知を発揮し、美しくもないわが身を露に差別された身と謙退し、恋の相手を恨んで見せる和歌を詠む。この紫式部の歌は、相手の文脈に反発しながら自分の無実さを訴える典型的な女歌のかたちになっている。

従来、この贈答の場面を道長と紫式部の交情を語るものとして見る立場もあったが³⁰⁾、二人の仲がどういう関係であったかよりは、なぜこの場面が『紫式部日記』の中に織り込まれたかがより重要なポイントになろう。すなわち、当該の場面は、道長と紫式部が恋仲を装い擬似的な恋の贈答を交わしたことを語ろうとするものであり、それは道長の望むところでもあるのである。

28) 前掲書 p.125

29) この「をみなへし」をめぐる贈答については、拙稿(2011)「『紫式部日記』の解釈と受容問題—女郎花をめぐる和歌贈答場面を中心に」(『日本学研究』33)において論じたので、ここでは道長の演出という視点にしばって述べている。pp.117-136

30) 萩谷朴(1970)「紫式部と道長との交情—『前紫式部日記』の存在を仮説して」(『中古文学』6) pp.27-37

また、『源氏物語』をめぐる道長との贈答に続く、次の場面を見てみよう。

渡殿に寝たる夜、戸をたたく人ありと聞けど、おそろしさに、音もせで明かしたるつとめて、

夜もすから水鶏よりけになくなくぞまきの戸ぐちにたたきわびつるかへし、

ただならじとばかりたたく水鶏ゆゑあけてはいかにくやしからまし

(『紫式部日記』)31)

この段は年次が不分明であるが、紫式部が土御門第の渡殿にいた頃なので、敦良親王出産のために、彰子が土御門第に里下りした寛弘六年(一〇〇九)六月十九日以降のものとするべきであろう。この場面についても、古来、道長と紫式部の交情を表わすものなのか否かが主な論点となってきた。『尊卑文脈』に紫式部を「道長妾」とするのと結び合わせて、二人の交情を認めようとする立場と、『尊卑文脈』の記述にもかかわらず、これらの贈答を社交や戯れと見て、二人の交情を否定しようとする立場とが対立してきたのである。「道長妾」とする『尊卑文脈』の記事については、今井源衛氏の「仮に一説として記しておくが、その内容の真否は保証しないといった程度のも」³²⁾という意見もあるように、今日は、中世の学者が俗説として考えられたと見るのが通説となっているが、ここで問題としたいのは、むしろその曖昧な性格である。

当該の場面では、渡殿にある紫式部の局の戸を叩く人があると聞いたけれど、恐ろしさに答えもしないで夜を明かした翌朝に歌を贈ってきた男と交した贈答を記している。ここで男というのは、『新勅撰集』に歌の作者を「法成寺入道前摂政太政大臣」としているように、道長であろう。紫式部が渡殿にいたとあるから、舞台は道長の私邸の土御門第であろうが、土御門第の主道長が娘のために雇い入れた自慢の女房に本気で言い寄ったりすることはまずないのではなからうか。また、言い寄って門が閉ざされたといってそのまま退散するというのも可笑しいのである。紫式部が道長であることに気付いていないのは、道長の行為としてはあまりにも不自然だからである。道長の局の戸を叩くという行為と「水鶏」の歌は、この記事の前の「すきもの」の贈答を踏まえたもので、「人にまだ折られぬものを」と詠んだ式部を本当にそうかと試す体で戯れをしかけたものと見てよからう。つまり、道長は恋に落ちた色男を演じてみたのである。そうとは知らない紫式部は、恐ろしさに戸を固く閉ざして一夜を過ごし、翌朝贈られてきた歌で前夜の事件の真相を知らされることになる。紫式部は道長の遊戯的な挑みに対して愉快的気持はなかったかも知れないが、機知に富んだ返歌をすることが式部に課せられた役割であることをよく知っていた。また、そうしたやり取りを書き記

31) 前掲書 pp.214-215

32) 今井源衛(1985)『人物叢書 紫式部』(吉川弘文館) p.188

すことによって彰子後宮の雅びな様子を讚美することが式部の職掌でもあったのである。実に周到に用意された道長家栄華の記録であると言えるが、ここでもう一度想起すべきことは、紫式部の主人でありパトロンであった道長の存在である。

6. おわりに

このように見てくると、まさしく一代の権力者にして文化指導者たりえた道長の全貌が明らかになってくるが、道長が紫式部に『源氏物語』のほかにも日記を書かせたのには、ある意図があったのではないかと思われる。道長は、自ら日記文学の主人公となりたかったのではないだろうか。その主人公というのは、行事を主宰したり女房たちに和歌を要求したりする平凡なパトロン—今までの研究で指摘されたこと—としての人物ではなく、紫式部を恋慕の女性としその女性を恋い慕う男性としての人物である。すなわち、道長は周辺の貴顕たちが、物語的歌集や歌物語の主人公となることを一つのステイタスと考えるふしがあり、例えば道長の父兼家には第二夫人の道綱母が書いた『蜻蛉日記』があり、ほかにも伊尹には『一条摂政御集』が、兼通には『本院侍従集』が、高光には『多武峰少将物語』がそれぞれ主人公として恋愛談を作り上げている。道長は自らも日記の中で女性に恋を求める風流男になりたかったものと見られるが、『紫式部日記』によって単なる後援者ではなく宮廷女性達にもてはやされる日記文学の主人公になりえたと言える。

政治家として一級の実力者たらんとする者は、文芸の世界にも関わり名をとどめようとする。平安時代の道長は、四十代にして、『源氏物語』という大長編物語製作のパトロンとなるとともに、日記文学『紫式部日記』と漢文日記『御堂関白記』の主人公的な存在として首尾よく文学史にその名を残し得たのである。

【参考文献】

- ・ 中野幸一(1994) 『紫式部日記』(新編日本古典文学全集 小学館) p.125、pp.165-166、pp.167-168、p.174、p.209、p.210、pp.214-215
- ・ 高階秀爾(1997) 『芸術のパトロンたち』(岩波新書) pp.1-232
- ・ 清水好子(1967) 「藤原道長」(『中古文学』1) pp.13-22
- ・ 山中裕(1995) 「撰関政治史—藤原道長を中心として」(『調布日本文化』5) pp.19-38
- ・ 酒井みさを(1977) 「藤原道長と文学」(『平安朝文学の諸問題』笠間書院) pp.245-260
- ・ 片山剛(2001) 「藤原道長の和歌活動(上)—その前半生を中心に」(『史聚』34) pp.33-52
- ・ _____(2001) 「藤原道長の和歌活動—三条朝まで」(『金襴短期大学研究誌』32) pp.13-21
- ・ _____(2002) 「藤原道長の和歌活動(下)—晩年の活動その他」(『金蘭国文』6) pp.29-47
- ・ 岡部明日香(2001) 「藤原道長の漢籍輸入と寛弘期日本文学への影響」(『奈良・平安期の日中文化交流』(農山漁村文化協会) pp.302-316
- ・ 山中裕(1996) 「紫式部と藤原道長—源氏物語の背景」(『古代学研究所紀要』6) pp.1-14
- ・ 今井源衛(1967) 『紫式部』(『国文学』12-1) pp.9-14
- ・ 与謝野晶子(1969) 「紫式部新考」(『日本文学研究資料叢書源氏物語1』有精堂) pp.1-16
- ・ 渡辺久寿(1978) 「紫式部日記考(一)—道長執筆要請説の妥当性について」(『日本文芸論集』5) pp.30-49
- ・ 清水好子(1966) 『源氏物語論』(塙書房) p.167
- ・ 福家俊幸(2006) 「『紫式部日記』道長描写の方法」(『早稲田大学教育学部学術研究(国語・国文学)』54) p.5
- ・ 池田尚隆(1989)の「藤原道長—文学愛好者・文壇後援者」(『国文学』34-10) pp.68-72
- ・ 拙稿(2011) 「『紫式部日記』の解釈と受容問題—女郎花をめぐる和歌贈答場面を中心に」(『日本学研究』33) pp.117-136
- ・ 妹尾好信(2008) 「『紫式部日記』と寛弘記の道長(『むらさき』45) pp. 38-41
- ・ 目崎徳衛(1994) 「道長をめぐる能書」(『水荃』16) pp.11-15
- ・ 岡田潔(1999) 「道隆の結婚と道長の結婚—『栄花物語』を主軸として」(『緑聖文芸』30) pp.5-11
- ・ 大野順一(2002) 「一条天皇と道長—源氏物語の好色性(上)」(『文芸研究(明治大学)』87) pp.21-52
- ・ 友田健次(1994) 「『紫式部日記』と『御堂関白記』—歴史の記録としての両者の差異と補完について」(『四条畷学園女子短期大学研究論集』28) pp.1-17

要 旨

芸術創造の長い歴史の上で芸術の保護者であるパトロンたちが果たした役割はかなり大きく、富と権力を誇るルネッサンスの王侯貴族や教会、新興の近代市民階級、コレクターや画商、そして現代の政府・企業などは、芸術のあり方に多大な影響を与えてきた。

日本にもパトロンによって文学が隆盛した時代がある。平安時代の摂関政治では、貴族たちが競って娘を天皇に嫁がせ、生まれた皇子を天皇に即位させて外戚関係を築き、権力を握もうとした。周辺に集められた女房たちは、知性を磨き合い、高め合って女房文学が花開いたのである。摂関体制がそのパトロンの役割を果たしたと言えるが、中でも一条天皇の中宮彰子サロンには、錚々たる才女が集められており、紫式部を始め、和泉式部、赤染衛門、伊勢大輔など、後世に名を残した人ばかりである。その彰子サロンの中心にはパトロン藤原道長がいて当時の女房文学を主導していた。もちろん道長は自分の権力維持や家の栄華を目的にしていたものの、平安女房文学があれほど栄えたのはやはり道長に負うところが大きいと言える。しかも、道長は単なる文芸の後援者にとどまらず、より積極的なかたちで文学創作に関ろうとした。

道長は、行事を主宰したり女房たちに和歌を要求したりする、平凡なパトロンとしての人物ではなく、紫式部を恋慕の女性としその女性を恋慕う男性として演出したのである。当時は貴顕たちが物語の歌集や歌物語の主人公となることを一つのステイタスと考えているふしがあり、道長も自ら女性に恋を求める風流男になろうとしたと見られる。政治家の中には文芸の世界にも関わり名をとどめようとする人がいるが、平安時代の道長は、『源氏物語』という大長編物語製作のパトロンとなるとともに、日記文学『紫式部日記』と漢文日記『御堂関白記』における主人公的な存在として文学史にその名を残し得ている。

キーワード：『紫式部日記』、パトロン、道長、文芸サロン、平安文学、女房文学、後援者、和歌

투 고 : 2011. 8. 31
1차 심사 : 2011. 9. 10
2차 심사 : 2011. 10. 1